昭和三年二月十六日郵便物認可（毎月一日一回發行）

聖書の眞理

第六十八號

六月號

主筆　江原萬里

私とイエス　江原萬里
基督教と現世的御利益　江原萬里
鎌倉講演
第二講　日本魂と鎌倉時代　江原萬里
イエス・キリスト
審判主たる人の子　江原萬里
世の憂と患難の喜　江原萬里
新約聖書に於けるmēとou　玉川直重
柏木通信　齋藤宗次郎
身邊漫筆　主筆
通信　その一
通信　その二

昭和八年(1933)六月一日發行

通信（その一）

現今我が國基督教界の耆宿田村直臣先生から左の書信に接して有り難く讀んだ。此の書翰は老先生の多年の深い經驗を以て書かれたものであつて、此の中に我等後進が熟讀すべき教訓が多々ある。殊に私の尊敬措く能はざるところは七十六才にして今日病臥の老先生がキリストのため又我が國のための獻身的奉仕である。

『日本國民の眞精神』を讀み、非常な益を得ました。感謝致します。私は七十六才の老人で病者です。日本歴史の研究はできません。どをか深く廣くキリスト化したる大和魂を以て、日本の眞精神を研究してください。私程バタくさい日本人はなかつたと思ひます。ユダヤの歴史を知ると雖ども、自分の國の歴史を知りませんでした。私は今日の基督者は同タイプの人が多いと思ひ殘念でなりません。

どをか他人の説に耳をかさず、直接にイエスに接し體驗し、大和魂を以てイエスの眞意を味つてください。東洋人でなくてはイエスの眞意は理解できないと確信いたします

私は日本建國の精神はイエスの精神を現實さするものと思ひます。世界をホームにする事が日本の大精神と信じます。今日の日本は建國の精神に反し、イエスの眞意に反するものと思ひます。武ではありません。愛です。平和です。支那人も、馬賊も、我が兄弟なりと自覺する事です。イエスの外、愛なる神を叫び玉ふたお方は一人もありません。天皇は父なり、臣は子なりと書物の上で叫ぶ學者はありますが、今日の日本はその理想を實現して居りません。どこに平和的、ホーム的氣分がみへますか、權力の世と云ふても過言とは思ひません。我が日本の大使命は日本をホームとなし世界をホームとなし、世界の平和を確立するにありと信じます。

日本の神器を研究して居ります。鏡、玉、劍は三位一體を顯はすものと思ふてなりません。どをかこの方面も研究してください。

五月四日　　田村直臣

聖書之眞理
昭和八年六月一日發行
第六十八號

私とイエス

私は大天才が鵬翼を張つて天下に雄飛するのを見て其の人を壯とする。されど其の大思想、其の大事業は私如き驢馬の能、牛の歩には沒交渉である。

私は一世に輝く高潔なる主義を持して世の不正不義と戰ひ、身窮厄するも尙節を曲げない偉人を見て心から尊敬する。その生涯がどの位私を勵ますかわからない。されど彼は餘りに偉大にして私は餘りに微小を感ずる。

私が心から親しみを感じ、同情を禁じ得ない者は、世から輕ろしめられる無能者、虐げられる弱者である。彼等は無能なる故に職を得ず、事業に失敗し、弱き故に働き得ず、不遇に對して訴ふる所がない。高潔なる品性と卓拔なる識見とを有し乍ら窮乏する者は尙自分に倚り賴む所がある。されど彼等には自己に何の賴む德性なく、智能なく、健康もない。私はかゝる者に心から同情する。

若しイエスが只單に世界最大の宗教的大天才であつて高遠なる人類の理想を說いただけの者ならば、私とは殆ど沒交渉である。又若し彼が高潔なる主義のため世の不正不義と闘つて殉教の死を遂げ、以て我等に正義のためには死も怖るべからざる事を示し給うことが、彼の我等に對する最大の貢献であるならば、私は彼を世界最大の偉人として尊敬はするが、私の救主として仰ぎ、彼に私の靈魂を委ねやうとはしない。

イエスは何の能力もなく、何の德性もなく、世から棄てられた者を限りなく愛し、彼に身を委ねる者の苦を自己の苦とし、之を援け起し、此の者に代つて死し、己が生命を以て之を神の恩惠の對象物とし給うた故に、私は彼を私の救主として仰ぐのである。神の子の生命を以て贖はれたる我が身なることを知つて、私は自分を尊敬し自分に聖をもち得るやうになつたのである。

基督教と現世的御利益

基督教は現世的御利益を説かない。商賣繁昌、病氣治癒、立身出世、一家幸福を其の目的としない。永遠に正義なる神の在し給ふこと、如何にせば我等は此の神と義しい關係に立ち得るか、現在我等を神から隔てる罪が除去されるか、其の事を説く。

世の多くの人は之を聞いて、かゝる事は生活に勞しつつある我等には全く無用の教であつて、閑人が閑仕事に研究すれば足ると考へる。飛んでもない間違である。人生の不幸の根本原因は我等の中に内在する罪に在る。此の罪が適當に處分されずしては人間に本當に幸福は來ない。視よ、我等は今不安、焦慮に馳られて居るではないか。之れ我等の靈魂が眞に信頼すべき神を知らないからである。我等の無知、無能、暗黑、憂愁、此れ皆神から離反した罪の結果である。

然るに我等は自ら雲霧を排して太陽を見ることが出來ないやうに、自ら我等の罪を排除して神と永遠不易に義しい關係に立ち、神から溢るゝ幸福を受ける事が出來ない。唯神の方から我等と宥和し給う事を待つのみである然り、而して基督教は此の喜ばしき福音を宣べ傳へるものである。之こそは他の何物をも犧牲として先づ第一に求むべきものではないか。一度神が我等に宥和し給うて我等は宇宙最大の富を得たのである。

基督教が現世に於ける御利益を説かないのは、それを與へないからでなく、それ以上のものを與へるからである。現世にも澤山の恩惠を受ける。我等は醫師から見放された病氣を克服して、以前に勝る精神的且つ肉體的活動をなしつゝある者を知る。我等は基督教に入つた其の時から、大酒家が己の努力に由らず不思議に厭酒家になつた事實を知る。我等は家庭の煩はしさのため極度の憂鬱に陷つた者が次第に活氣を得、周圍の境遇に打ち勝ちつゝある者を知る。我等は經濟界の非況に在つて能く之と闘ひつゝある者を知る。彼等は皆益々性格向上し、智能增し、高潔喜悦の生涯を送りつゝある。是皆我等の集會に於て現に親しく視るところである。

鎌倉講演（二）

江原萬里

第二講　日本魂と鎌倉時代

鎌倉幕府と源義家

頼朝の鎌倉幕府開設は大化の革新及び明治維新と相併んで日本歴史の三大革命と云ひ得ると思ひます。此の頃まで日本全國に國司があつて州郡を領し、又公卿豪族のもつてゐた莊園には莊司と云ふものがあり、此等の上に朝廷があつて之を治めて居ました。然るに頼朝は朝廷に乞ふて國司の側に守護を置き、莊司の外に地頭を置き、此等をして警察事務を取扱はしめ、自ら總追捕使となつて此等の警察官の長たることの許を得ました。それ故政治の實權は悉く朝廷を離れて鎌倉幕府に歸し、頼朝が事實上日本の『國主』たる位置を占めるやうになつたのであります。

平家の盛大であつた時伊豆に流された一流人の頼朝がどうして一門榮華を誇る平家を倒し、かやうに日本全國を統一し、歴史上大革命を遂行し得たか、そこに非常に興味深いものがあります。

西洋の諺にロマは一日にして成らずと云ひます。まことに事の起つたのはその起つた日に起つたのではありません。又滅びたのも滅びた日に滅びたのではありません其の事件が大事件であればあるだけ、それだけ其の源も亦遠く深くあります。鎌倉幕府も亦後白河法皇の治承四年源の頼朝が伊豆で兵を擧げた日に起つたのではなく實はそれから凡そ百年前、鎮守府將軍陸奥守、八幡太郎、源の義家が鎌倉に八幡宮を造營した時に起つたのであります。鎌倉幕府は、頼朝が建設したのではなく、實は義家がその開祖であると云つて差支ないのであります。

義家の時代は藤原氏の全盛時代でありました。天下は藤原氏一門の有でありました。道長が、

此の世をば　我が世と思ふ望月の

缺けたる事のなしと思へば。

と咏つたのは有名であります。藤原氏は皇室の姻戚であり、代々攝政關白となつて自分の孫に當る天子の後見をなし、一門皆顯榮の地位につきました。そして傲り高ぶり且つ奢侈淫蕩、日々詩歌管絃に耽けりました。又自分の娘を生んだ親王を天子とするため、一門の中でも勢力爭をしました。又藤原氏の血統でない天子は二年と位を保つことは出來ませんでした。之が爲め皇室にも亦度々分爭が起りました。保元の亂はその最もいたましい實例であります。若しかやうな狀態が天皇親政であるならば親政は永續しません。現に平の將門は反いて下總の猿島に皇居に模して邸宅を作り、自ら新皇と號しました。

かやうに朝廷の政治を喜ばないものが諸所に起りました。朝廷では之を討伐するために武士である源平兩氏を使用せざるを得なくなりました。軍人が天下の權を掌握するに至つたのは、政治家がその責任を果さないためであります。然るに當時朝廷は武士に賴り乍ら之を賤しめました。客易に彼等の昇殿を許しませんでした。それのみならず彼等の正當なる要求すら容れませんでした。源の義家が父に從つて陸奥の安倍貞任を討つた前九年の役には、朝廷は之を賞する事甚薄く、又後自ら鎭守府將軍となつて、出羽の淸原武衡を討つた後三年の役には、朝廷は之を私鬪と認め其の功を賞しませんでした。それ故義家は携へ歸つた敵將の首を道端に捨て、自分の財を投げ出して部下の將士の功をねぎらひました。こゝに於てか關東武士は源義家を德とし、朝廷に仕へるよりも源氏に仕へることを喜ぶに至つたのであります。

如何に義家が人を信じ之を愛したかは、自分の家來とした安倍宗任が或る夜義家の伴をして只一人車に從つた時、兄の敵をうつは今時と思つて車を窺ひました。然るに義家は宗任を信じて少しも警戒することなく、其の時も車の內ですやすやと眠つてゐました。之を見て宗任は翻然心を更め、爾來彼に心服するに至つたと云ふ故事でも知られます。

かやうに源氏が關東武士の心を得ましたからこそ、賴朝が伊豆の一流人を以て、當時平家にあらざれば人にあ

らずと云はれた平家に反旗を翻かへした時、此等の關東武士は源家往時の恩顧を思ひ、われもわれもと賴朝に從ひ、遂に鎌倉に覇業をなさしめたのであります。義家は嘗て人に語つて云つたそうであります。我が後裔に必らず天下を取るものが起ると、果してそうでありました。

義家自身若し後三年の役の後、平の將門のやうに朝廷に反して東北に據つたならば、日本は多分義家のものとなり、彼にして將門のやうな異心があつたならば、別の天子となつてゐたと思ひます。然るに義家は自ら高きを望まず、位四位下で終りました。それ故賴朝も亦その父祖以上の高位を望まず、北條氏も亦同樣に低きを以て滿足しました。賴朝は天子を尊び、勅使鎌倉へ下向の時には自ら邸を出て之を迎へました。此の精神は源氏の流である足利尊氏、德川家康にも傳はりました。足利尊氏を一概に逆臣と云つて仕舞ふのは本當に日本歷史を知らない者の言であります。

私は思ひます。今滿洲に於て働いて居る我が國の軍人や文官にして、若し源義家の心を以て此の支那東北の民を愛撫せば、此等の民はやがて日本人たることを願ふに至り、將來日滿兩國の間に眞に美はしい關係が出來ると思ひます。然らずして只領土の擴張、日本民族の經濟的發展のみを目的とした時は、今支那が此の地を失つたやうに遠からず之を失ふであらうと思ひます。それのみでなく、何日かは朝鮮も臺灣も失ふでありましやう。『日本の正當の權益を害した怪しからぬ支那の頭を毆るのが何故惡い』と云ふ正義では日本は『滿洲を救ひ、極東を救ひ、世界を救ふ』ことは出來ません。

承久の亂

私が日本歷史の精華は鎌倉時代に發したと云へば、多くの人々殊に國粹主義者は必らず反對するでありませう鎌倉時代は日本人として赦すべからざる大汚點を史上に殘したものである。執權北條義時は後鳥羽、土御門、順德の三上皇をそれぞれ隱岐、土佐及び佐渡に御流し申したのではないか。又北條高時は後醍醐天皇を同じく隱岐に御流した。これ臣下として極惡無道、天人共に怒る大

逆ではないか。此の鎌倉時代を以て日本歴史の精華であると云ふのは餘りにも不謹愼であると。高時については暫くおき、義時の三皇遠流の事件卽ち承久の亂については、果して大逆であつたか否か、少しく檢べて見度いと思ひます。

始め頼朝が幕府を鎌倉に開いた時、日本國は久し振りに統一され、人民は皆安心して生業を營み得るやうになりました。それ故國民は幕府の政治を謳歌したのであります。然るに獨り不平なものがありました。それは京都の公卿たちであります。彼等は父祖傳來把握して居た政權が全く他に移つたので大に不平でありました。それで三代將軍實朝が暗殺されて源家の嫡流が絶えたのを絶好の機會として、御鳥羽上皇と順德上皇とが主となつて政權の奪回を謀られたのであります。そして諸國の武士を禁裡に集めました。鎌倉へも押松といふ者が院宣をもたらして窃かに入り來り、朝廷に味方する者を募りました之が幕府によつて露見しました。

そこで尼將軍政子は諸將を簾下に集め、安達景盛をして嚴然として諸將に言ひ渡しました。

皆心を一にしてうけたまはるべし。是れ最期の詞なり。故の右大將軍（頼朝のこと）、朝敵を征伐して關東を草創せし以降、……（朝廷に對して）報恩の志淺からんや。而るに今逆臣の讒に依りて非義の論旨を下さる。名を惜しむのやからは……三代の將軍の御恩を思ひ、その遺跡を全うすべし。但し院中（上皇）に參らんと欲するものは只今申し切るべし。

かく云ひ放つた時、諸將皆感激して鎌倉のために力を盡さんことを誓ひ、誰れ一人西に走らうとする者はありませんでした。

そこで諸將は義時の家に集まり、軍の評定を致しました。或る者は足柄、箱根に陣をかまへて西軍を待たうと云ひましたが、大江の廣元が云ふには、ぐづぐづする時は異心のものが出て來るかも知れない。卽刻兵を擧げて京都を攻めるに若かずと、諸將之に一致しました。そこで義時の子泰時を總大將に任じ、武藏の國の兵を集めて之を引率せしめる事にしました。然るに廣元が云ふには

今ゆる〳〵武藏の兵を集めて居ては遲い。今夜すぐ總大將は單身鞭を上げて出發せよ、そうすれば東北の武士は雲の龍に從ふやうに從ふであらうと。總大將泰時は之に同意し、翌朝未明單身京都征伐に出發したのであります時に泰時は十八才でありました。何と勇ましいではありませんか。こゝいらに本當の日本武士らしい氣持があります。そして我等基督者が信仰の戰に出陣する時は當に此の覺悟がなくてはならないと思ひます。神を信じて人に賴らず、單身卒先飛び出すべきです。その仕事それが神の御仕事であつたならば、人は後からついて來ます。泰時が出發して三日以內に十餘萬の兵が追つかけて之に從つたと記されてあります。

義時は上皇の院宣をもつて來て鎌倉の諸將を誘つた押松を釋放してかく云ひました。

お前は京都に立ち還つてかく上皇に申上げろ。臣は何の罪なくして御討伐を受けますが、敢て逃げもかくれも致しませぬ。聞くところによれば、陛下は戰爭がお好きの由、就ては謹んで臣の長男の泰時、次男の朝時以下十餘萬人を獻上して戰爭をさして御覽に入れます。然しそれでも尙御滿足でなければ猶二十萬人の兵隊があります。義時自ら之を將ひて後から參上致しましよう。

押松歸つて此の事を朝廷に傳へたところ、公卿たちは皆顏色を失ひました。然るに御鳥羽上皇は云はれるのに「よし、よし、今に鎌倉が空つぽになつたら、誰かきつと謀反を起して義時を殺すものが出て來るであらう」と。上皇は賴み難きを賴んで此の戰爭を惹き起されたのであります。

一方東軍の總師泰時は京都攻擊ときまるや、即時、鞭を上げて出發しました。然るに吾妻鏡には珍らしい記事があります。

かくて打ち出でぬるまたの日、思ひ掛けぬ程に、泰時只一人鞭を上げて馳せ來たり。父胸打ち騷ぎて、「如何に」と問ふに、「軍のあるべき樣、大方の掟などをば、仰の如く、その心を得侍りぬ。若し道の邊にも、計らざるに、辱く鳳輦を先に立てゝ、御旗

を擧げられ、臨幸の嚴重なる事も侍らんに參り逢へば、その時の進退如何に侍るべからん。この一事を尋ね申さんとて一人馳せ還へり侍りき」と云ふ。

義時とばかり打ち案じて「賢くも問へる男の子かな。その事なり。正に君の御輿に向ひて弓を引くこと如何あらん。然ばかりの時は、兜を脱ぎ、弓の弦を切りて、偏に畏まり申して、身を任せ奉るべし。然はあらで、君は都におはしまし乍ら、軍兵を賜はせなば、命を棄てゝ、千人が一人になるまで戰ふべし」と。云ひも果てぬに急ぎ立ちにけり。

然るに泰時が恐れた鳳輦の下向はなく、上皇は京都に在り、諸兵を淀、宇治にやつて守らせましたが、此等は大敗して京都に逃げ込みました。然るに上皇は禁裡の門を堅く閉さして敗軍の將の入るのを拒まれました。そこで山田次郎重忠は門を打たゝいて『懦主我を誤る』と罵り、嵯峨に走つて自殺しました。

上皇は泰時に宣下して云はれるには『近日の事、朕が意に出でず。皆臣僚の所爲なり。唯其の罪を罰せよ』と。こゝに於て責任者四人を求め、之を鎌倉へ護送することゝし、途中で處刑しました。然るにその中の一人なる藤原光親は實は責任者ではなく、却つて上皇を諫止した書翰が後から發見されました。それ故泰時はいたく之を悔ひました。爰に於て事の責任者は上皇である事、然かも上皇は罪なき臣下を身代りにされた事が明瞭となり遂に後鳥羽上皇を隱岐に、順德上皇を佐渡にお流し申す事にしたのであります。土御門上皇は事件に關係なく、屢々後鳥羽上皇を諫止されたのでお流しゝない筈であつたが、上皇から他の二皇流され自分獨り都に留まるは心苦しいとて、自ら求めて土佐に遷られました。義時は此の時沒收した三十餘ヶ所の領地を悉く戰功の將士に分ち與へ、自分は一物も取りませんでした。之が承久の亂であります。

冷靜に事の次第を檢討する時、義時、泰時は決して大逆でない事がよくわかります。神皇正統記の著者、藤原親房も亦、非は上皇に在る事を論じて、

王者のいくさと云ふは咎有るを討し、きず無きをば

亡ぼさず。頼朝高官にのぼり、守護の職を給ふ。是皆法皇（後白河）の勅裁なり。私に偷めりとは定め難し。後室（政子）其の跡をはからひ、義時久しく彼が權を執りて人望に背かざりしかば、下には未だ疵ありといふべからず。一往の謂ばかりにて追討せられんは、上の御とがとや申すべき。謀反起したる朝敵の利を得たるには比量せられ難し。（田中智學氏著大國聖日蓮上人より轉記）

と云つてゐます。眞に正論であると思ひます。我等は本當の正義は國家以上に存在し、只臣下のみが守るものでなく、一國の君主も亦、必ず之に從ふべきである事を之で深く學ぶのであります。力は斷じて正義ではありません。正義が力であるのであります。之を混同して獨乙は破れました。

承久の亂は鎌倉幕府の汚點でなく、非は京都にありました。若し此の樣な政治が度々行はれたならば、我が國民は今のやうに皇室を尊敬せず、我國の主權は他に移つてゐたかも知れません。然るに實は鎌倉幕府ありし故に殊に泰時とその孫時頼の仁政があつた故に、皇室は安泰を得、日本國民は本當の政治の何たるかを學び、且つ此の時以來始めて、我が國の精華である武士道が起つたのであります。

泰時及び時頼

泰時には八人の弟がありました。大ていは腹違ひの兄弟でありました。泰時は父の跡を繼いで執權となつた時父の遺産の殆んど全部を弟に分ち與へ、自分は總領であるに拘はらず、僅かの部分しか取りませんでした。そして云ふのに、自分は父から執權職と云ふ大役を讓られたのだから他のものは皆弟に讓るのが當然だと。

然るに此の弟の中に泰時をなきものにして、執權職を奪はうとしたものがありました。泰時はこれを知つても知らぬ振りをしますので、尼將軍政子はたまり兼ね、自分で若將軍頼經を抱いて泰時の邸に入り、關係者三人を流し、他は全く不問にして事を解決しました。

泰時の弟思ひは非常に深いものでありました。ある弟

の身の上に極く些細な事件が起りました時、急いでそれを助けに行きました。部下の者が之を諫めて、執權の重職に居るものがそれしき事を自分でなさらなくてもよろしいではありませんかと申しますと、泰時は之に答へて云ふのに、自分が若し兄弟との間の親しさを失つたならば、どうして執權の重職に居られやうかと云ひました。まことに頼朝と格段の差でありまして、之があつたから三代で滅んだ頼朝の後を承け、源氏でも無い北條氏が七代も天下の權を執り、日蓮さへ彼等を國主と云つた程の實力をもつたのであります。

私は承久の亂について泰時が皇室をどう思つてゐたかを述べ。次にその弟思ひであつた事を述べました。此の外彼について語るべきことは澤山ありますが、一一之を述べるわけにゆきません。只その中彼が謙遜であつた事と勤勉であつた事とを述べませう。

泰時は頼朝の墓に度々詣うでましたが、彼は決して堂上に上らず、必らず堂の下で之を拜しました。身は「國主」たる實權を掌握し乍ら此の謙遜がありました。彼は後四位の位を得ました。源三位頼政でさへ三位であるのに、彼はやつと四位に上つたのであります。然るに彼は『功なくして爵進むを畏る』と云つて之を恐懼しました。彼は又諸將と一緒に居て少しも權柄ぶりませんでした。

彼の勤勉は驚くべきものがあります。毎日衆に先んじて幕府に出仕して政治を掌り、當直の日は――執權も當直しました――決して床をとつて寢ませんでした。又彼は部下を愛しました。部下のうち負債で苦しんでゐるものは自分が利子を拂つてやり、又元金まで償還してやつたものも多くあります。饑饉の年には倉を開いて多くの人々に米を施與し、流民の救護をしました。その外彼について語るべきことは多くありますが今は述べません。彼が制定した貞永式目は實に武士道の何たるかを示したものでありまして、史上特筆すべきものである事を述ぶるに止めます。

次に彼の孫であつた時頼について語りませう。時頼が幼時その母なる松下禪尼から、障子の破れたところだけを纔ぎはぎして儉約を敎へられた事は誰も知つてゐる事

であります。今から見ればケチと思はれる程、時頼は儉約でありました。或る晩、自分の親しい者と一緒に酒を飲まうとしました。然るに生憎肴がありません。そこで彼は燭をとつて臺所を探し、遂に醬油の入れ物を見つけ之を嘗め嘗め、二人で酒を飲んださうであります。身執權の職に在り乍ら、女中すら使はず、この仕末です。

時頼はお祖父さんなる泰時の制定した貞永式目を嚴守しました。彼は又青砥藤綱のやうな賢者を微賤から拔擢して大臣に致しました。藤綱が夜滑川で十文を落したので附近の者を傭ひ松明を點じて之を探し、そのため五十文を與へた事は誰も知るところであります。現代の利巧者が之を馬鹿だと評するばかりではありません。當時も之を冷評しました。藤綱は之を聞いて云ふには、自分は失つた十文を得、その上五十文を人に與へて世を益し、合計六十文の得をしたと。面白い會計學說ではありませんか。藤綱こそ本當に經世濟民の學を知つて居た者であります。

彼は時頼の信頼を受けましたが、決してそのため法をまげませんでした。或る者が北條家に對して公事を起しました。他の官史は時頼を憚つて此の者を敗訴にしました。然るに藤綱は之を聽いて事情を審査し、此の者を勝たせました。そこで彼は大いに之を喜びました。そして禮を藤綱にもつて行つても藤綱は決して之を受けない事を知つて、夜こつそり藤綱の後庭に之を投げ込んだところ、藤綱は翌朝之を發見し、わざわざ使をやつてその者に之を返へしました。かやうに公平であり、廉直でありました。こう云ふ人物が今日本の官吏に又政黨に又實業界に多く在らば、我が國は今のやうな國難に會つて上下共に苦しまないと思ひます。

かやうに廉潔であり、然かも人には惜しみなく施した藤綱は、常に家計が不如意でありました。彼の差した刀は漆を塗らない白鞘であつたさうであります。衣服はお粗末千萬、それで時頼が之を見兼ね、俸給を上げてやり度いと思ひましたが、只では決して承諾しない事をよく知つて居りましたから、時頼は藤綱に云ふに、「わしは夢に神樣から藤綱に錄を增せと云ふ御告げを受けたから

錄を增す』と云ひました。藤綱はそれを聞いて、『それでは君は夢に藤綱の首を切れとの御告げを受けられましならば、私の首をお切りになりますか』と云つて之を辭退しました。これが鎌倉時代の總理大臣でありました。時賴はかやうな人材を微賤から拔擢して用ひたため、大いに世は治まり、諸民は北條氏を德としたのであります。

後年時賴は執權を子の時宗に讓り、水戸黃門のやうに全國を行脚して民の困難を察知しました。一夜圖らずも雪の中を佐野源左衞門の落ぶれた家を訪ね、之に宿を乞うて彼の落魄の事情を聞きました。源左衞門は客を煖めるのに薪なく、自分の愛惜する鉢植の梅の木を切つて焚いた事は謠曲『鉢の木』に有名であります。その時源左衞門は云ひました。『若し一朝事あり、いざ鎌倉と云ふ時には、落ちぶれたりと云へ、鎧に身をかため、痩せたる馬にまたがつて推參する覺悟であると』。果してその通り實行しました。

北條氏はかやうにして關東武士は勿論、全國民の人心を得ました。それ故時宗の時代、支那四百餘州を併呑し遠くはシベリヤ、ペルシヤ・東アジアから歐洲の今のチエッコ・スロバキヤ附近まで平定して有史以來の大帝國を建設した蒙古が、朝鮮王を介して朝貢せずば兵をさしむけて討つぞと云ひました時、賴山陽が「相模太郎膽甕の如し」と歌ひました北條時宗は斷乎として彼の申込を拒絕し、次で文永十一年及び弘安四年再度の來襲に國を擧げて之を防ぎ、遂に我が國の歷史の光輝に汚點を印することを防ぎ得たのであります。

若し賴朝が鎌倉幕府を開設せず、京都の文弱なる公卿に政權が委ねられ、泰時、時賴の仁政なく、日本武士がゐなかつたならば、此の時日本はどうなつたでありませう。外は外國の侵人を防ぎ、內は皇室を保全し、日本武士を作つて國の眞髓としました。この鎌倉時代こそ本當に日本歷史の精華ではありませんか。我等が世界に誇るもの、世界が我が國について推賞するであらうものは、決して美術ではありません。數億の財產でもありません。源の義家の高風雅懷、北條泰時の寬仁、時賴の勤儉、時宗の勇氣、靑砥藤綱の廉直、此等鎌倉時代から生れた美

はしい日本魂であります。之が源氏なる足利、及び德川に傳はり、明治維新となり、今日の大發展をなさしめたのであります。今や我が國民は浮薄な西洋の物質的享樂的思想と生活とに心醉して、父祖傳來の此の精神を忘れて居るのは、嘆かはしいことではありませんか。

現在我が國が直面してゐる國難を打開し、東洋平和の大使命を果すには、この鎌倉時代の眞精神に立ち還へるを要すと私は思ひます。然し乍ら、私共は再び六百年前の昔に立ち還へる事は出來ません。新時代には新しい精神が要ります。六百年來の日本の精華を世界に對して顯はすには、只昔を回顧するだけでは足らないのであります。之を保存すると同時に、益々之を世界的にしなければなりません。それには此の中に更らに偉大なる精神を注入する必要があります。然らずば『日本の正義は滿州を救はず、極東を救はず』その『正義は世界を支配する』に足りません。この日本魂を世界的にする者は何處にありますか。私が信じ、且つ人に傳へやうとする基督教なるものは、少なくとも之れ以下のものではありませんん。イエスは云ひ給ひました。

われは律法また預言者を毀つために來れりと思ふな毀たんとて來らず、反つて成就せん爲なり。

故にもし此等のいと小さき誡命の一つをやぶり、且つその如く人に敎ふる者は、天國にて最小き者と稱へられ　之を行ひ、且つ人に敎ふる者は、天國にて大なる者と稱へられん。我なんぢらに告ぐ、汝らの義、學者・パリサイ人に勝らずば、天國に入ること能はず。（マタイ、五・一七―二〇）

律法と預言者とはユダヤ人父祖傳來の國粹でありますイエスは之を毀つためでなく、之を成就するために來給うたのであります。その如く基督敎は我等日本人の父祖傳來の日本魂を毀つものでなく反つて之を成就するものであります。されば我らの父祖から傳へられた此の美はしい精神の「一つを破り、その如く人に敎ゆる者は」基督者として最下等であります。イエスは云ひ給ふでせう。「我汝ら日本の基督者に告ぐ、汝らの義、日本の道學者國粹主義者に勝らずば基督者にあらず」と。

イエス・キリスト（九）

江原萬里

一六 審判主たる人の子

大祭司いふ、『われ汝に命ず、活ける神に誓ひて我等に告げよ、汝はキリスト、神の子なるか』。イエス言ひ給ふ。『なんぢの言へる如し、かつ我なんぢらに告ぐ。今より後なんぢら人の子の、全能者の右に座し、天の雲に乘りて來るを見ん』（マタイ傳二六・六三、六四）

當時、キリストは『ダビデの子』であると云ふのと全く異なつたキリスト觀があつた。此のキリスト觀は舊約聖書にその起原をもつが、舊約聖書以後、もつと詳しく云へば紀元前百六十五年頃から紀元後百三十五年頃の間に最も發達した信念であつて、世の終り、地上文明の最後の審判、義者の復活、聖徒の國の出現の思想を云ふものである。其の最も代表的なる一つはヨハネ默示錄である。之は時滿つるや、今榮華を誇る大なるバビロンの罪が審判かれ、須臾にして滅び失せる。而してその後に新らしい天と新らしい地とが天から降り來ることを示したものである。

我また新らしき天と、地とを見たり、これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。我また聖なる都、新らしきエルサレムの夫のために飾りたる新嫁のごとく準備して神の許をいで、天より降るを見たり。また大なる聲の御座より出づるを聞けり。曰く「視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神人と偕に在してかれらの目の涙をことごとく拭ひ去り給はん。今よりのち、死もなく、悲歎も、號叫も、苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり。斯くて御座に座し給ふもの言ひたまふ。『視よ、われ一切のものを新にするなり』。（默示錄二一・一—五）。

此の神の國が前に述べたダビデ王國と異なる主要點はユダヤ一國民の理想と云ふよりも全人類的であり、現在社會の終末、其の罪惡の審判、既に死んだ義者の復活に

在る。舊き天地が幕を取り去るやうに引き拂はれた其の後に新天地が現出し、此の世の文化バビロンが滅んだ後に『聖なる都新らしきエルサレム』が花嫁の如く神の許を出で天から降ると說くのである。萬物一新、今我等の眼には覆はれて見ることを得ない天的靈的世界が將來此の地上、我等の目前に顯出すると云ふ點がその顯著な特色である。かくて死もなく、悲嘆なき神の國となる。

かやうに此の黃金世界は現代科學の敎へるやうな、現在の社會が漸次進化の結果顯はれるのでなく、突如として天から降り來るのである。地から湧き出るのでなくして天を劈いて降るのである。それは今既に在る。我らの眼には秘せられて居るが、神の中に隱れあるのである。然るに時來るや、丁度濃霧が拂はれて太陽の光が地上を照すやうに、神が之を我等の眼前に顯はし給ふのである。故に之を顯現アポカリプシスと云ふのである。

我等は今見る我等自身と我等の住む天地とは我等と天地との全部でなく、我等の知るところは只其の僅かなる一部分であり、我等の內、又天地の內には今我等の眼之を見ず、耳之を聞かず、心未だ思ふことを得ない多くの神秘が潛むことを感ずる。いつかそれが顯はれる時が來るであらう。其の時眞相を知る。それは我等と天地とが進化してそこに達すると云ふよりも、現在我等に秘せられて居るものが、我等の眼前に顯はれ、展開するからである。此の思想は現代の自然科學が示し、又社會科學が主張する進化の理論と大きな相違である。されど誰が聖書が說く此の眞理を否定し得やうか。

此の終末觀、顯現論は前にも云つたやうに古く舊約聖書中にその源を發し、イエスの御降世より百五十年前より御昇天後百五十年の間に、ユダヤ人の間に廣く抱懷された思想であつた。彼等の多くの者がイザヤの預言に示されたやうな神の國とその建設者なるダビデの子の出現を待ちつゝあつた時、他の多くの者はかやうな神の國を待ち望み、而してかやうな新天新地を出現せしむる『神の聖者』『王』『人の子』の出現を待ち望んだのである。

彼等は人間の口から出る敎が如何に尊くとも、その說く福音が如何に力ありとも、之を以て人の罪は除かれず

人は救はれない。只天を劈いて降る「永遠」が此の地の「時」のうちに入り來り、超自然の光の洪水が此の自然を覆ふて、始めて全宇宙が一變し、人間の至福は得られると思つたのである。而して之を爲す救主メシヤは人の形を以て神のうちから顯はれ來り、彼によつて神永遠に人と偕にあり、人は神の民となると思つた。舊約聖書中此の思想はエゼキエル書及びダニエル書に在る。

エゼキエル

バビロンの領域であつた廣漠たるメソポタミヤの大平原中、チグリス及びユウフラテス兩河の流の水を引いて田を耕し、當時豐穣を以て知られたシナルの野、ケバル河の畔を沈思しつゝ、且つ神に祈りつゝ、亡國ユダの預言者が歩んで居た。時は夕、太陽は燦然として眩ゆき光を放つて今や西方に沒せんとして居る。夕映の雲は之に反映して黄金の縁をなし、此の雲間を破つて太陽の光線は宛かも車輪の輻のやうに四方を射つた。偉觀壯觀、得も云はれない。その時、彼は天に一つの大なる異象を見た。

我見しに、視よ、烈しき風、大なる雲、および燃ゆる火の團塊、北より出で來る。（エゼキエル一・四）

此の火の團塊に各々獅子の如き、又牛の如き、又鷲の如き面ある『四ツの生き物にて成れる一個の形あり、其の狀は是の如し、即ち人の象あり』。かく人の形をして居た此の火の團塊は燃ゆる熱火の如く、又電光の如く、右に左に走つた。そしてこれと一緒に、その下に大なる四つの車輪がその輪を回轉することなくして動いた。

又此の人の如き異形の上に『畏ろしき水晶のごとき穹蒼あり』、遠く上方に展開して居た。こゝに青玉のやうな御座があつた。而して『人のごとき者在す』。その腰の上も下も火の如く見えた。又その周圍は『雨の日の雲にあらはるゝ虹のごとし。エホバの榮光かくのごとく見ゆ』。ユダの亡國の預言者は之を見て恐れおのゝき地に『俯伏した』。その時天から聲あり、彼の耳に聞えた、曰く『人の子よ、起あがれ』と。之がエゼキエルが神に召されて預言者となつた時見た異象であつた。

此の時エゼキエルは天の御座に在す『人のごとき者』から『人の子よ』と喚びかけられたのであつた。そも此の『人の子』は何の意味であらうか。恐らくは、此の時國滅び、神殿は毀たれ、身は異國に捕虜となり、偶像の民に使役せられる弱い人の子、然かもエホバの榮光を見て地に俯伏したこの弱い人の子は又天に在る此の偉大なる生き物の形でもあり、更らにその上に御座を占め給ふエホバの榮光のうちにも亦存する「人の象」でもあることを思はしめられたのであるまいか。（ルーキンウキリアムス氏による。）我等が今見るところの我等の憐なる境遇その弱々しい姿、然かもその姿は又天の高くに在し、偉大にして崇高、天地を動かす神の御座の邊にもそれに似たるものあり、否、神御自身の中にも在り、今は秘せられて居るが一度神がその能力と榮光とを以て降り來り、此の地上に顯はれ給ふときは、地に在る我等弱き人間は今在る如き弱き姿と全く異なる光輝と強大とを顯現することを意味しないか。（以下次號）

世の憂と患難の喜

四月十六日講話會に於ける感話

それ神にしたがふ憂は悔なきの救を得るの悔改を生じ、世の憂は死を生ず（コリント後書七・一〇）

斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、我等の主イエス・キリストに賴り、神に對して平和を得たり。また彼により信仰によりて今、立つところの恩惠に入ることを得、神の榮光を望みて喜ぶなり。然のみならず患難をも喜ぶ（ロマ書五・一―三）

今は春、櫻は滿開、野山に霞棚引き、鶯の聲切りに聞え、自然に歡喜の聲滿つ。人生にも亦かゝる春時がある。はち切れる勇氣、滿々たる希望内に在り、外は何を見ても愉快でたまらない青年時代がある。ピッパは歌つた。「季は春、時は朝、萬物善からざるなし」と。我らにそう思はれる時があり、又あつた。

然し乍ら我らが生命を受けて生れ出てた此の人生は決して四時薔薇の花咲き薫る花園ではない。年が進むにつれ、世の經驗が深まるにつれ、種々のわづらしさが我らを襲ひ來るのである。或は貧、或は病、或は家庭の不和或は事業上取りかへしのつかぬ大失敗、そのための孤獨誤解、又は愛する者との死別、生別、此等の煩ひが大波小波とおし寄せて來る時、我等は何故こんな世に生れて來たかと、それを恨めしく感ずるのである。そして早く此の世を去ることが何よりも願はしくなる。人生は涙の谷、我等は小暗き死蔭をさまよう。

經濟學の實際的目的は此の世から貧乏をなくする事に在る。然るに此の學問は我等に貧乏がどうして此の世に在り、どの位それが我等の生活を悲慘ならしめて居るかは、よく示してくれるが、此の悲慘から我等を救ひ出す道については確信がない。醫學の目的は我等の身體の病氣を醫すことにある。然かも醫學は我らの身體の如何に弱く、種々の病の器であることだけはよく知らしてくれるが、我らの身體を强めて一切の病にかゝる事のないやうにする力はない。社會學然り、倫理學然り、人間の知識、智慧は何れも我らの生涯を悲痛から救ひ、我らの眼の涙を拭ふてくれない。アダムとエバが樂園を追はれてから此の方、此の世に涙は流れて盡きないのである。

ダンテの神曲地獄篇は、救はれない我らの靈魂がどの位惱んでゐるかを叙したものとして眞に迫つてゐる。源を此の世に發して流れて盡きず、或は淀んで惡氣の沼となり、或は黑ずんで暗憺たる流となり、或は瀧となつて落下する人間の涙の流が地獄の底に達する頃には、全く氷結して寒冷骨を刺す。そこに至つて人の心は全く氷の如く冷酷無情となり、只天を呪ひ、人を恨み、永久にそれから脫する何等の希望もない。これが不幸に陷つた我らのどん詰り、世の憂の終局である。パウロが「世の憂は死を生ず」と云へるはそれである。

世には幸運の人がある。天賦の才能、容色、親讓りの財產、行くとして可ならざるなく、爲して成らざるなき幸運、かやうな人が少なくない。彼等は自分と同じ人間として生れて來た者にどんな不幸があるかを知らず、又

その惱を知らうともせず、自分だけは運命の特別の寵兒としていつ迄も幸福で暮せると思ふ。然し乍ら凡そ賴むに足らないものにして幸運の如きものはない。

明日ありと思ふ心の仇櫻
夜半に嵐の吹かぬものかは

我らはいつ如何なる天災に會ふかも知れない。死は忽ち我らから愛する者を奪ひ、不慮の災難は事業を失敗せしめ、財を失ひ、健康を失はしめるのである。ロシアの革命の結果、國を追はれた貴族、我が國先年の大地震、その後に於ける銀行の破綻のため財産を失ふたものなど昨日の榮華に變る今日のみぢめさ。昔幸運であつた者だけ、それだけ苦しみが身に滲むのである。貧の苦しみは親から貧乏を讓り受けて生れた者にはさ程感じない。一朝榮華の生活から落ちた者程その痛さを知るのである。幸運こそ悲痛の原因である。その落ちた時の憂は例へるに物なし。空しく過去の榮華を回想し、それを思ひ出すことによつて益々心を蝕らすのである。何處にも何の光明もない。「世の憂は死を生ず」である。

更らに又世には自分の才自分の能により幸福をかち得た者がある。彼等の賴むところは幸運ではない、己の力である。彼等は己の力に賴り遂に成功した。かくして巨萬の富を蓄へ、顯榮の地位を得、幸福を誇り、宗教は弱者には氣安めとして必要ならんも自分の如きものには全くその必要なく、神を恐れ、神に信賴するなどは馬鹿氣きつた事と思ふ。己の力のみを信じたるこの傲慢は益々己を大にするために、知らず知らず惡事をなさしめる。然かも自己の巧妙な智慧を信じ如何なる惡事をなしても決してそれがバレることなく、ヘマはしないと思ふのである。

あゝされど神はあなどるべきものでない。神は此の世の智者をその智慧によつて捕へ給ふ。今の世に頻々として生ずる疑獄事件を見よ。彼等は皆奸智に長けた者なるが故に猿が木から落ちたのである。然かも一度落ちるや最早起ち上る事は出來ない。彼等の初めの願は己を大にし、顯榮の位置におくことに在つた。一度身は囹圄の人となり、世の指彈を受くる身となつて、最早此の世は生

き甲斐がなくなるのである。世に懊惱、怨恨の一生を送る者にして彼らの如きはない。それから脱する道は只一つ、自殺あるのみ。かゝる者の一生程悲慘なものが又とあらうか、「世の憂は死を生ず」である。

此等世の人々は只自分の幸福をのみ求めてゐる。而して幸福は遂に得られず、反つて不幸に陷り、人生の暗黑天地の無情を思ふに至るのである。彼らに若し神ありとせば、彼等の眼に映ずるその神は無情冷酷なる神である。彼らは己れの幸福を求めて、幸福の源なる正義の神を求めなかつた。彼らは不幸を嘆ずるもその不幸の原因であるところの罪、即ち正義なる神に對する己の心の背戻を悔ひない。神の創造し給ふた天地の大道を歩まず、神がかくあれと要め給ふ御意に服つてそれに適ふ者とならうとせず、只管自己が願を滿さうとしたその罪、これが一切の不幸の原因である事を感じない。それ故に彼等が一朝不幸に陷るやその憂は慰を得ず、彼等の靈魂は遂に回復の途なく、悲慘なる死を來すのである。

人生の不幸悲慘の本當の原因は神に對する罪である。されば、我らの内に此の罪が内在する限り、我等は此の涙の谷、小暗き死の蔭を脱して光明の世界、永遠に神と義しく、それ故に永遠に神の滿ち足れる喜悅の生涯を送ることは出來ない。己が罪を認め、神にその赦しを乞ふものにして始めて之をなし得る。

基督教は實に此の罪を問題の中心とするものであり、如何にして神から罪が赦され、神と義しき關係に立ち歸へり、罪から脱し得るか。之を示すものが基督教である罪は我らの外になく、我等の心の中に在る。此の罪のある間、神は我らの心に愛の神として臨み、我らを惠み給ふことは出來ない。何よりも先づ此の罪が處分されねばならならない。而して我らは自己の死を以てしなければ此の罪を除くことは出來ないのである。然るに神は、我ら自身の死の代りにキリストを立て、その死を以て我らの罪の死となし給うたのである。そしてキリストをその死から甦らしめ給ふて、我らキリストを信ずる者は最早死の苦しみなく、その罪が赦されて神と義しき關係に立ち歸へらせられ、キリストの生命を我らの生命として受

け、これに生きて永遠の祝福を享受し得るやうになし給ふたのである。之が基督教である。心から之を信じ、キリストを己れ自身として見よ。丁度自分が生きて居る事實を疑はないやうに、この事實を信じてそれに生きて見よ。この眞理こそ我らを罪と死から新に甦らしめるものである事を悟るであらう。こゝに始めて何人も回心、新生の經驗をなし得る。人間がその根本から一新するのである。

かく一新されて最早我らの前途死はなく、此の世の人の憂ふるが如き憂は最早少しもなくなる。あるものは神に對する平和の心である。今まで我等の生涯の前途は不安に滿ち、人生は薄暗く、死の彼方に何の光明もなく、神若しありとせば無情冷酷、又は怒の神として我らの眼に映じたものが、此の時からして肉體の死は死にあらず神は永遠に愛の神にして我らを渾身の愛を以て愛し給ふ神であり、此の神と義しい關係に立つことを得て最早世界何の恐るゝものなきを感じ、我らの前途希望滿々たるものあるを感ずるやうになるであらう。

斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、我らの主イエス・キリストに賴り、神に對して平和を得たり。また彼により信仰によりて今立つところの恩惠に入ることを得、神の榮光を望みて喜ぶなり。（ロマ書五・一二）

キリストを信じた者には死はない。死を生ぜしめる世の憂はない。あるものは生命である。歡喜である。希望である。神の恩惠に對する感謝である。

然し乍ら我等キリストを信じて永遠に神に愛せられる者となつたと云ふ事は、最早此の世に於て患難は來ない。只暢氣な生涯を送り得ると云ふ事ではない。患難は來る。山の如く來る。『義者なやみ多し』主イエスは云ひ給うた。『汝ら世に在りては患難あり、されど雄々しかれ、我すでに世に勝てり』（ヨハネ傳一六・三三）と。患難は多くある。されどキリスト既に之を克服し給うて、我らキリストにつく者は之を克服し得るのである。今まで苦しみに會つて之を避けやうとし、苦しみに捕へられて絶望の中に鎖された者が、今はあらゆる憂き事を喜んで迎へ擊ち、之を克服し得る力を與へられるのである。パウロ

は云つた。『然のみならず患難をも喜ぶと』、何故か。

そは患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり。希望は恥を來らせず。我らに賜ひたる聖靈によりて神の愛我らに注げばなり

（ロマ書五・三―五）。

本當に花らしい花は溫室の花ではない。朝日に匂ふ山櫻花である。本當に人間らしい人間は人の世の苦しみを少しも知らず、安樂榮華に暮す者ではない。貧困に生ひ育ち、幾度か死生の間を往來し、種々の辛慘を嘗め、始めて人物は出來上るのである。正宗の銘刀が出來上る前には、幾萬回か火に入れられて灼熱せられ、湯に入れられて消され、大小の金槌で交互に打ちのめされ、打ち曲げられなければならない。たしかシェークスピヤであつたと思ふ。

憂愁の眞中より堀出され、燃ゆる恐怖に灼熱せられたぎつ涙の湯に投ぜられ、死滅の激感に打ち挫がれ鐵は形成りて用をなす。

と歌つた。かくして武士の魂たる銘刀は出來上るのである。患難汝を玉にす。玉も磨かねば光を放したい。神から本當の生命を與へられた者には、其の光を放つために磨きをかけられるのである。それ故に基督者は患難を避けやうとせず、その來るも之を憂へず、却つて之を「喜ぶ」に至る。誰が貧と病とを喜ぶものがある。誰が人に棄てられて感謝することが出來やう。然るに本當の基督者は誰でも皆云ふ。自分の今日あるは患難の賜であると。かく云つて之に感謝する者である。同じだけの苦難が世の人に臨めば彼らは耐へることが出來ない。『世の憂は死を生す』。されどその患難が基督者に臨めば、基督者は之によつて益々鍛錬され、向上し、聖化されるのである。

かやうにして患難は基督者をして、益々神を知らしめ之を讃美せしめ、己を向上せしめる。然るに此の世の人の眼には、基督者が患難に在ることは、全く無益であるのみならず、之を見ていやに思ふ者である。貧しき者、病める者、又は世から棄てられた者が、その友人、親戚に生じた時には、之を厄介視する。眼を蔽ひて之を見ず

なるべく寄りつかなくなる。彼が若し基督者とならずして世の中にて働かば必ず出世して自分たちも亦その餘澤を受くべかりしに、なまじか基督者となつたため、自分たちには何の益も得られなくなつたと云つて恨む。かくしてヤソになる時は病氣すると云ひ、又貧乏して出世しないと云つて基督者なるが故に特に彼を責め、その信仰を非難するのである。患難の中にある基督者は果して彼らに何の善きことをもしないであらうか。

否、常人が患難のうちに在り、憂ひ悲しみ、世を厭ひ、人を呪ひつゝある時、基督者が信仰によつて患難に耐へ患難を喜び、神を讃美し、人生を樂しみ、己が生存に意義を發見し、毅然として起つて居る事實程、周圍の人々に偉大な寄與をして居る時はないのである。此の事實がどの位周圍の人々の心を潔め、彼等をして世の惡に向はしめず、人生には物的快樂よりも更らに高貴なるものがある事を思はしめるであらうか。如何なる敎、如何なる社會改良事業もなし得ない事を、苦難のうちに勇敢に戰ひつゝ、且つそれを喜び、その中に高い滿足を發見して居る基督者はなして居るのである。

然り、彼が人々に顧みられず、助けられず、顏を蔽うて避けられ、獨り苦しむの一生程社會改革家を刺激して社會改革の必要を認めしめるものはない。苦難の中に在る基督者は實に改革者の改革者であり、此の世の眞の柱石である。かゝる者とされし者こそ光榮ではないか。やがて時來る。今我らが受ける此等の暫くの輕き患難は極めて大なる永遠の重き光榮を得せしめるのである。（コリンと後書四・一七）

我等の國籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主として其の處より來りたまふを待つ。彼は萬物を己に服はせ得る能力によりて、我らの卑しき狀の體を化へて、己が榮光の體に象らせ給はん（ピリピ三・二〇、二一）

それを望みつつ此の世の患難に耐へる者、之を基督者と云ふ。

新約聖書に於けるmēとou

玉川直重

一國の文學を他國語に飜譯することは、至難の業であるといふよりも、嚴密に云へば寧ろ不可能事である。國には各々其の國獨特のものがある。而して之は少なくとも其の國の言葉以外には、何れの國語を以てしても充分に表現することはできない。例へば英語のHomeを家庭と邦譯しては甚だ物足りない。また邦語の孝行にしても、之をFilial pietyと云つては別物の感じがするのである。飜譯の困難は既に單位に於いてかくのごとくである。況んや一句一文に於いてをやである。

新約聖書に用ひられてある否定の疑問文に二種あり、一はouを用ひ、他はmēを用ひる。ouを用ひたものは『何々にあらずや』といふ意味を表はし、『然り』といふ肯定の答を促すものである。これに反してmēを含んだものは、『まさか何々ではあるまいね』と寧ろ曖昧味を帶びた遠慮勝な問であつて、『否』と否定の答を豫期するものである。ouとmēの意味の相違を最も適切　示してくれるものはヨハネ七の四一（後半）と四二である これを意譯してみると次のやうなものとなる。『また或る者共は言つた「だつて、このキリストはまさかガリラヤから出ては來られないだらうね(mē)。聖書にキリストはダビテの裔から生まれ、ダビテの居た村ベテレヘムから來ると云つてゐるではないか(ou)（コリント後書十二の十八參照）』。斯く判然とした意味の相違があるのであるが現行の邦譯聖書には往々にして（殊にmēの）その意味がハツキリ出てゐないのは遺憾に思ふ。

例へばヨハネ六の六七の、『なんぢらも去らんとするか』である。此の譯は原語の最も大切な意味を取り逃がしてゐる。イエスは御自らが天から降つたパンであつて之を食する者は永遠に生きるのであるとお教へになると弟子と稱ふる者の中多くは、『こは甚だしき言なるかな誰が能く聽き得べき』と呟く。するとイエスは仰有つた。『君達の中には不信者がゐる。だから父が賜つた者でな

くては私に來ることできないと前にも言つたのである』と。不信者達は此の言葉を聞いて斷然彼を棄て去つた。

イエスは勿論彼等の不信であつたこと、また斯樣な結果になることは御承知で居られたと同時に十二使徒の信仰に對しては充分の確信を有つて居られたであらう。然るに多分ペテロを始め他の弟子達は、形勢の振はないのを見て多少不信者達に影響されてゐたものらしい。そこでイエスが彼らに對して發せられた問が問題の『なんじらも去らんとするか』であるが、此の句の原語はmeを含んでゐて、強いて邦譯を試むるならば、『(まさか)君達も亦往きたいではないのだらうね』となる。『爾曹も亦去らんと意ふや(舊譯)』ではない。『なんじらも去らんとするか(改譯)』でもない。また永井譯の『汝らも往かんと欲するに非ずや』に至つては寧ろouの意味であつてmeの意味ではない。

前述の如くイエスは十二弟子達を信用して居られたのみならず、御自らに對する彼らの信仰を尊敬して居られたのであらう。從つてその御質問は、『君達も亦往きたいと言ふのではないだらうね』と極めて御遠慮勝である。斯く信用され、尊敬をされてこそ、萎えんとするペテロの信仰も甦生つて、『主よ、我ら誰に往かん……汝は神の聖者なり』と告白するに至つたのである。而して此の謙遜な神々しいイエスの御心情は、邦譯の『汝らも去らんとするや』其他には伺はれないのである。

meを含む疑問文は新約聖書を通じて七十一回「?」見出される。これはヨハネ愛用の表現であつて二十一回、共觀福音書に十八回、その他に合せて三十二回といふ割合である。次にヨハネ福音書に見出されるものゝ中著しきものの譯を二三試みる。

ヨハネ三の四。イエスは言ひ給ふた『私はほんとうに君に言ふが、人は生れ變らなければ神の國を見ることはできないのだよ』。するとニコデモ曰く、『えつ、如何して生れるのですか。老人だのに。(まさか)モ一度母の胎に這入つて生れることができると仰有るのではありますまいね』。

ヨハネ四の二九。サマリヤの女はイエスのお話を承つて大に驚いた。弟子達が町から歸つて來ると水瓶を遺して町に行き、人々に言つた。『來てごらんなさい、私が爲たことを何もかも仰有つた人を。これはまさかあのキリストではありますまいね』。

ヨハネ四の三三。弟子達は町から歸つて來て云ふ。『先生、お召し上り下さい』と。イエスは答へられた。『私君達の知らない食物がある』。すると弟子達は互にはに云つた。『誰も彼に食物を持つて來たのではないだらうね』。

ヨハネ七の四七。イエスがエルサレムで教へて居られた時のことである。祭司長達とパリサイ人達は使丁を使つてイエスを捕へさせやうとしたが失敗して歸つて曰、『駄目です、未だ曾て此の人のやうなことを語つた人はありません』。すると祭司長とパリサイ人達は答へた。『馬鹿、お前達も惑はされてゐるのではあるまいな、司たちやパリサイ人達には彼を信じた者はないだらうな』。

ヨハネ八の二二。『私が往くところへ君達は來ることは出來ない』とイエス言ひ給ふ。ユダヤ人達は解せずして曰『何だと、私が往くところへ君達は來ることはできないと言つたぞ。まさか自殺するのではあるまいなあ』。

ヨハネ一八の一七。イエスは捕へられて大祭司の庭へ引き入れられた。ペテロも彼に踉いて行つた。すると門守の婢女がペテロに尋ねる。『まさかあなたも亦この人のお弟子の一人ではありますまいね』。彼女は勿論ペテロがイエスの弟子であることを知つてゐて求めて『否』と言はしめるやうな問を發したのは皮肉である。ペテロは惡いとは知りつゝも敗けて答へた『ぢやあないよ』。

ヨハネ一八の三五。イエスは捕へられてピラトの前に立ち給ふた。ピラトが『あなたはユダヤ人の王ですか』と尋ねると、イエスは折返して、『それは君自身の言か、それとも他の者が私に就いてそう云つたのか』とお尋ねになる。するとピラトは答へた『私がまさかユダヤ人ではあるまいし（そんなことを云ふもんですか）、あなた御自身の同胞と祭司長達ですよ、あなたを私に付したのは。一體あなたは何をなさつたのですか』と、ピラトは狡猾にも責任を免れやうとしてゐる。

柏木通信（第三十信）

齋藤宗次郎

柏木の近狀　年改つてより既に半歲に近し。新綠又も全地を蔽ふの美觀に接して通信子の心强き歡喜に滿さる。眼前に於て過去の約束は實現し、未來の光明は豫表さるゝといふ活事實を目擊するからである。五月の內村邸は極めて閑靜に見受けられた。先生の記念會に上京せし人々も夫々北へ西へと歸り去り、岡田君までが新居に移り行つた爲であらう。風波の鎭まり返つた時の樣だと靜子夫人が其淋しさを譬へられしは至當の言であると思ふた。全集の編輯室も亦之に準ずるの靜けさを保つた。同僚は皆秀英舍に詰めかけて苦心の英文校正に餘念なき有樣であるが、余は獨此處に留つて書翰の原稿整理を續け、又次回配本の『講演上』の原稿選り出しに當つて居る。月々巡り來る卷頭寫眞の選定も少からざる考慮を要する。地方に在つて遙かに祈を以て此業を助けらるゝに加へて、新潟の或る兄弟は同地名產の蓬團子を贈つて仕事の餘暇に笑味を乞ふといひ、岩手の友は力を養へよとて多額の鷄卵代を送り來るなど實に感謝に堪へない。此程講堂を背負ふ小庭の一隅に咲き出でし朱色大輪の躑躅花は日毎に余を慰めつゝある。曾て先生が、栃木傳道の歸途山坡の叢中に發見せし數寸の小株を拔き來つて植ゑられしものであると云ふ。今は三尺の丈に延び掬すべき自然の野趣を率直に現はしつゝある。余は幼時此花に飾らるゝ東北地方の原野に山鳩の歌を聞きつゝ樂しみし折を思ひ出して甚だ懷かしくある。

老櫻よ聽け　武藏平野の中央を彩る小金井の櫻花滿開の日であつた。久山氏が國分寺なる櫻雲莊の自邸に開かるゝ洗足會に臨む會員に對し、先づ櫻堤の漫步を以て始めては奈何との勸誘に從ひ、三時頃花小金井停留所に下車して花下の逍遙を試みた。櫻は元文年中幕府が吉野及び櫻川より移植せし水道堤兩側一里半に亘る數種幾千本の山櫻である。花は赤茶黃綠の嫩葉を翳して天與の美を發揮しつゝあるの景觀であつた。三十二年前白百合花香る七月の空に、第三回角筈夏期講談會々員一同が內村先生に伴はれて、人影を見ざる堤上の葉櫻を眺めし時を追想して感慨の深きものがあつた。我等一隊は互に物語りつゝ斜陽に映ゆる頭上の花を仰ぎ、懸崖の綠を宿す脚下の流水を臨んで約十町の間を往返した。無數の觀客と肩々相摩することあるも、我等は行き交ふ人々に目を觸れなかつた。老櫻よ聽け！、O博士の櫻花を裝ふ神の意畵匠、M伯の櫻花に於ける美と愛、N農藝通の櫻樹の保

護、H水道部長の東京上水歴史談、F博士の山櫻の表徴する信仰の日本等の精神的清話を、汝等は二百餘年の長き間、汝の天眞を解せぬ輕浮なる都人士の淫歌狂態に倦み果てたであらう。然し時は遂に來た、耳を傾けて我等の語る所を聽け、而して尙汝等の齡を延べて平和と讃美の聲が蜂蝶の如く花冠の間を舞ふ時を待てと、花に寄する此短き言葉を遺して歩みを轉じた。麥と茶と桑の間を通る村の小徑を辿つて夕暮會場に達した。新築の庭宅は美にして廣くあつた。晩餐は佳肴を連ねられた。然し誰人も之を意とし之を賞する者はなかつた。開會と同時に各自の語る信仰談と祈る祈とは熱心であつた。別れを惜むと口々に言ひし十六名は九時半の上り電車に乘つて夫々歸宅の途に就いた。

日曜の集會　六日の旅路を各自遣はされたる方面に於て、主の爲に或は働き或は學び或は戰つて各々必要なる苦難の經驗を嘗め、測り難き恩寵を味ふ教友等も、一たび安息日となれば一同顏を合せ信仰を一つにして父なる神の御前に集る。我等は此處に主に在りて人を愛することを學んで、少しづゝ人らしき者に育てらるゝのである。異體同信の喜びはキリストに因らずしては到底得られない。願ふ凡ての國民と共に全人類と偕に神を信じ神を愛し神を拜する日の來らんことを。

一、日本の救はるべき唯一の途　名古屋常治
一、奇蹟の信仰　藤本武平二
一、排立比書と内村先生　山桝儀市
一、贖罪の解　大島正健

蘆屋の松山に登る　阪神を繫ぐ岡本の里に、入間田悌佶氏夫妻を訪ふて、中央に於ける聖靈の恩惠による顯著の事實を報じ、關西に於ける教友の純眞の活動を聞きて互に感謝に滿された。余は間もなく力强き歩みを蘆屋の黑崎幸吉氏邸に進めた。直ちに迎へられて書齋に入つた。キリストに在る友情は無言の間に既に結ばれた。過去と現在とを語つて感謝の盡くることなく、光明の未來を語つて希望の浪の胸に越ゆる思ひがあつた。不圖眼を卓外に轉じて我身の意外の仙境に在るに驚いた。溪谷の幽邃、海光の輝き、山腹の靜閑は夫々三面の各窓に映出し居るではないか。獨天下の佳景を壟斷するといふは當らぬが、靜かに天啓に浴し、詩想を養ふ所としては絶好の塵外鄕である。初對面の黑崎夫人は頻りに余を優遇せんとして中餐の調理に立たんとしたが、余は之を固辭して北窓の上より麾ねく六甲山つゞきの松山に登るに決した。氏も亦大いに余の即興の擧に同意せられた。後庭に出でゝ獨木橋を渡れば即ち登山口である。體軀重き兄を背後より助けて、枯葉に滑る急傾斜の山徑を一歩々々登

る時にも、福音の喜びと光明の感謝とは二人の口に絶えなかつた。踏傍の竹籔は屢々前進を遮り、荊蕀は威嚇の刺を以て迫れど、望は高く絶嶺にかゝり、視野の展け行く樂しさは此等を蹴破つて敢て屈せず、遂に翠綠の樹下に立つ身となつた。心に神の約束を信じて脚下に打出濱の白波を瞰、右方摩耶山麓の神戸より遠く淡路島大阪方面に至る大觀を一眸の裡に收むる時、武器と金貨と虚榮を造り出す工場の煤煙は漲り、競馬野球の狂號は響き、酒池肉林の惡臭飛び、絃歌亂舞の醜態は今猶減びざるを知れど、榮光の日の到來を豫想して既に天下を占領せるの喜びがあつた。エルサレムよエルサレムよ……との主の新しき御聲は日本帝國の同胞に向つて發せらるゝを聽いた。二人は此處に廬を建ることを願はずして急ぎ山を下つた。一人は佇立して見送り一人は振り返りて手を擧げつゝ山下に惜しき別れを告げた。

全集の祝賀慰勞晩餐會　内村鑑三全集が昨春發刊以來毎月祝福の下に刊行を繼續し來るを、遠隔の地札幌に於て喜び且つ感謝しつゝある祐之博士は、今回の上京を機とし、全集直接の關係者一同を招きて祝賀慰勞の意を表せらるゝ爲め、四月十日夜丸の内中央亭に晩餐會を催された。主客十五名食卓を圍んで頻繁に笑聲を漏らしつつ歡談に二時間餘を送つた。誰一人己が勞苦を誇る者なく、只管に神の聖旨を頌へ、最後の第二十卷までを神と人類の前に捧げんことを祈るのみであつた。餐後英文の部の編輯と之を歐米人に供するの途に就て少しく協議した。主は時に應じて最善の案を賜ふことゝ信ずる。十時篤く謝して辭去。

教友親睦會　愛の交換は幾度行ふも益あるのみである。内村先生記念の諸集會を開くに際し、福音の爲に如何に祈つたか如何に苦心したか、相互の心中を披瀝するは主に在る兄弟姉妹として望ましいことである。鈴木敏元氏司會、質素な晩餐に感謝の箸を納めて後、一同の感話に移つた。青年の大抱負を聽いて喜ぶと共に壯年は勿論老人の意氣の熾んなるに心を强めた。死を超越せし基督者の衷に働く十字架の生命は永久の進展を續けるのである。修養も社交も餘興も我等には無用である。只靜かに又堅く葡萄樹に連るのみである。三十名を代表して大島先生の感謝の祈は獻げられた。四月十三日夜九時。

持地夫人の退院　老婦人の身を以て近年筆に舌に强く働かしめらるゝ同夫人は、三月下旬千葉市講演の歸途急病に襲はれ、新宿井出病院に加療のことゝなつた。竹内女醫の手篤き診療によつて平癒に近づける夫人を訪ひし時、感激の涙を浮べて病中に體驗せし神恩を語るを聞いて別れたが、四月六日退院の報に接して大いに欣んだ。

身邊漫筆

○鎌倉の集會は會衆二十人足らず、極めて少數ではあるが、甚だ精選され、熱心な人ばかり、空席は殆どない。而して會は非常に靜肅である。或る會の後で山田君が思はず『善い會だねえ、本當に祝福がある』と感嘆した。

○第二回は別稿『世の憂と患難の喜』の私の感話の後で矢内原君が『何故ここに來りしや』とて此の度の私の擧に贊成した理由を述べ、何故諸君はここに來りしや、若し人生最大の幸福、永遠の生命を得やうとして來たならば、それに相當する犧牲を拂はねばならないと說いた。彼は言のみの人でなく、又晉に講演を以てするのみでなく、會場維持のため實際それを實行して私を感激せしめた。我等は當分教會のやうに會場の維持には困らない。

○第三回は山田君が『入學試驗と基督教』と題して、高等學校教授としての種々なる經驗を語り、家庭に基督教の大切な事を述べた後で、私が別稿の鎌倉時代に於ける我等の父祖の精神を語つた。第四回は矢内原君獨りにして、サムソンについて『力の秘訣』は何處にあるかを說明し、第五回は私が先づ最初の三福音書の原本であるマルコ傳とマタイの書いたと云はれるロギアにつき語り、聖書のイエス傳は目擊者の書を基礎とするものであるから、其の史的價値は確實であることを簡述した後、三谷君が『ダニエル書を讀む』とて、ダニエルは實在の人物であつたか否か、高等批評の結論は兎も角、ユダヤ人にはかやうな理想があつた。而して人間の理想なるものは空なものでなくして、現實に根ざし、現實を淨化したものである。故にダニエル的人物は居た。彼は本當に神を信じて生きた。假令現在神が自分の願を聽き給はなくても尙神を信じた。之が本當の信仰であると云つて感銘を與へた。

○東京では此の度の會は鎌倉の諸教會の脅威であらうと噂して居るそうだが、そんな事はない。私は教會の人にはなるべく教會のため盡されたいと勸めて居る。教會の或る有力者が「江原さんがああ云ふ會をされるやうになつて、無教會主義も會堂が必要だと云ふことがわかるであらう』と話した由、實にその通り。私が此の度一番困つた事は會場であつた。幸に今の家の所有者の好意で今の會場を借り得た。之は立派な西洋間で餘りに立派すぎる。多分無期限には借り得まい。此の會の存續する限りこれからは會場で苦しむことであらう。

○無教會主義は無教會堂主義ではない。集會をする以上會場は必要である。それ故教會と同樣に會堂で苦しむのである。私は此の度會場で苦しんで始めて教會の會堂問題に同情出來るやうになつたのは大きな獲物である。然し乍ら、我等の會場問題と教會の會堂問題とはその性質を全く異にして居る。彼は有てる會堂の維持のために苦しみ、我は有たぬために苦しむ。二者何れが善いかと云ふに、他の事情にして同じければ、會堂を有つことは有たぬ事よりは遙に善い。但し他の事情が違ふ。

○何故會堂がある方が善いか。それは全く、聖用にのみ使用し得る會堂は、前日には浪花節の大會あり、夕には娼婦の踊もあるであらう公會堂を借るより遙に善い事は自明である。且つ一定の場所に在ることは、無教會主義が會場を求めて各所のビルデングに轉々するよりも善い殊に東京大阪等を除き地方での集會は劇場、寄席でなくば、個人の私宅以外には出來ない。從つて無教會主義は私宅集會主義となつて仕舞ふ。將來の日本の基督教はそうあつてはならない。

○無教會主義は教會のやうに會堂を有つてはならないと云ふ主義ではない。內村先生は數百人を容れ得る會堂を有たれた。然らば一體何處に教會主義と無教會主義との相違があるか。或る人は教會には一定の制度があり、無教會主義は無制度であると說明する。されど內村聖書研究會を觀るにそこには簡單ではあつたが嚴守された不文の制度があり、會は善く組織されて居た。又其の他の研究會について親く聞くところによれば、教會以上に圓滑なる不文の制度がある。無教會主義の集會は決して烏の集りではない。教會よりももつと實際に適し、目的に合つた制度がある。それによつて組織されて居る。

○それ故に根本的相違は會堂の有無ではなく、又制度の有無でもない。果して然らば何處に在るか。爰に至つて私は今更に『無教會主義』なる名稱の不適當を思ふ。此の不幸なる名稱のため、どの位教會者を誤解させ、又無教會主義を誤らしめて居るか知れない。私は思ふ。我が國に於ける兩者の根本的相違は、信仰が先か、組織が先かの見解であると。無教會主義は始めに信仰、然る後、其の信仰に相當する集會組織が現はれるべきことを主張する。生物學に於て先づ機能が創始されて、之に相當する構造が生ずるのと同じ理である。然るに我が國の教會の歷史を見るのに、最初に外國の教會制度に模して教會組織を造り、外國の傳道資金を輸入して會堂を建て、かくお膳立て成つて信者を造らうとした。今も尙その方法を踏襲して居る。無教會主義は之に對するプロテストタ

ンチズムである。

○現今教會不振の聲を聞くこと久しい。會員の熱心は冷却し、財政は窮乏し、會堂の維持至難の叫が上つて居る。その因つて來たる源は何處に在る。それは教會が我等日本國民の心から生じた信仰の上に建設されず、其の信仰が會堂を維持して居るのでなく、最初外國の制度に模して教會が組織され、外國の金で會堂が建てられたのが、一朝外國との關係薄らぎ、經濟界不況のために傳道資金が來なくなつた結果ではあるまいか。それ故無理に會員を集め、無理に献金をなさしめやうとする。かくて教會は教會員の歡喜と感謝の集會でなくして、不平と苦惱の重荷となつた。若し今までに教會が我等國民の本當の信仰に根ざして建てられ、その心からなる感謝の献げ物として會堂が建てられて居たならば、何者か之を毀つことが出來やう。基督教は須く日本的でなければならないわけは此處にもある。

○無教會主義は此の眞理を提唱するものである。それ故之は教會の敵でなくして、彼等の本當に善い味方であり彼等よりもより以上に堅固な地盤の上に、卽ち日本國民の心の中に、それに根させる信仰の上に、教會を建てやうとして居るのである。教會はもつと注意して無教會主義を解しなければならないと同時に、無教會主義も今少し親切に教會に說明する必要がある。ここに說明した無教會主義こそ、私は現今の教會の行き詰りを打開し、今後進みゆくべき唯一の道であると思ふ。

○無教會主義は決して組織的行動を否定する者ではない寧ろ現今の教會以上に日本國民の性情に適する組織を產まうとして居るのである。國民に信仰が行き亘り、その自然の要求として集會が各地に起り、國民性に適する團體が組織された時、その團體內に於て學び得た公共的行動が、國民の社會的行動の規準となり、その集會の組織が將來の日本の社會組織を改造する方向を示すものとなる。かくして基督教は次第に日本の社會組織を根本から改造する。ルーテル、カルビンの教會が西洋の社會組織政治の諸制度に多大の貢献をしたやうに、日本的基督教が、將來我が國のそれに貢献し、更に西洋に範を示すやうになるであらうと思ふ。

基督教講話會

毎日曜日午前十時より

鎌倉六地藏東一丁、キング商會別館

聽講料　毎回二十錢

通信（その二）

一

謹啓先生御玉體實に容易ならざる御容態と承り候に愈益々神様の御榮光を拜し奉り、誠に申上やうもない感激に打たれ奉泣謝候。

扨て御靈著『聖書的現代經濟觀』頃日拜讀の機を惠まれ、多大の御恩惠に浴し申候。就中『聖潔と誇』にて新生命に接し、小生數月來の悶々たる心中に一大光明を獲復活の喜悅に預り申候。『自己を聖め、愛の人、正義の士たらんと欲する事をやめよ』との御仰、誠に深き〳〵愛の充滿せる味ひても〳〵味ひつくせぬ此の一言に此の數週を占領せられ居候。先年『思想と生活』誌にて拜讀の砌は今日程の感銘無御座候ひしが、唯今は唯々主イエスキリストを衣るの他、全く前途なき事明瞭となり、一念上を仰ぐのみと覺悟仕候。

尙『聖書の眞理』本月號『我等は我等以上の者』に又言ふべからざる聖力を頂戴し新しき感謝を捧げ申候。『我等の裏には現在人々が見、自分で自分を知る以上に深い何者かゞある』と御證し被下、此何者かに由り、私如き者も理想に到達せしめられ得べしと承りては、誠に勇躍せでは居られず相成り申候。前記兩御文は全く朝より夕まで小生の靈魂の糧となり、此勵ましと御力に由り生き居候。誠に拙文意をつくさず遺憾千萬に候へ共微衷御探取被下度願上候。（下略）

二

（前略）毎月貴誌『聖眞』を透して教へらるゝ事多く、最近には御病氣を押して街頭に福音を獅子吼さるゝ事は一面痛快ですが、他面痛ましくも悲壯に感せられます。健康を與へられ、福音を信ずる者も數知れず有り乍ら、御病氣の先生を用ひ給ふ主の御恩召に今更ら恐懼の外ありません。然り『よわき時に强ければなり』です。

六百年前鎌倉に屯して諸宗を敵に獅子吼した、健康無比なる豪僧日蓮に比して、先生の場合は如何に悲壯なる戰鬪である事よ、涙なきを得ません。私は先生に何等の力も籍し得ない事を殘念に思ひます。唯我祈るなりです。しかし戰つて戰ひぬいて下さい。先生の血を灌ぐ戰場は我等後輩の屍を曝す戰場です。私は疊の上で平凡に死ぬ氣はありません。先生の悲壯なる御決心を知つて、うつかり安逸を貪られません。（下略）

（昭和三年二月十六日 第三種郵便物認可）

夏期聖書研究會

日時 八月九日（木）午後五時 開會
同 十四日午後一時迄

場所 靜岡縣御殿場町東山、東山莊

講師 畔上賢造、塚本虎二、黑崎幸吉、金澤常雄、石原兵永
其他特別講演數氏

費用 會費金貳圓、宿泊料全期間金拾圓（全期間ニ滿タザル時ハ一日金貳圓）
東山莊ニ宿舍アリ、婦人宿舍ノ設備モアリ

申込 會費金貳圓ヲ添ヘ七月末日迄ニ東京市淀橋區柏木四丁目九一九 今井館內 夏期聖書研究會事務所ヘ申込マレタシ

塚本虎二著

基督教十講

定價七十錢 送料六錢

現代日本と基督教

定價參拾五錢 送料四錢

イエス傳對觀表

定價參拾錢 送料二錢

塚本君の著書が明快にして何人にも解し易く、然かも人心の深いところに訴へること既に定評があり、敢て之がため贊言を費すの要を見ない。上記著書は廣く讀まれ、多く世を益した書である。（東京九段坂向山堂及び名古屋市流川町一粒社發行）

藥學士 平山 清著

再版 信仰と健康への道

定價五十錢 送料四錢

嘗て本誌に基督教が他の宗教、無宗教に比して結核治癒率甚だ多く、死亡率甚だ少ない事實を明にして多くの讀者の注意を惹いた著者が此の種の諸文を一書としたもの。此度再版を發行す特に本社にて取次す。

聖書の眞理定價（送料共）

一部	二十錢
半年（六部）	一圓十錢
一年（十二部）	二圓十錢
海外一年	二圓六十錢

拂込は聖書の眞理社（振替東京六三三七五番）へ。獨立堂にてもよし

昭和八年五月廿八日納本
昭和八年六月一日發行

編輯印刷兼發行人 神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三 江原萬里

發行所 東京市澁谷區向山町九七 聖書の眞理社

印刷所 東京市神田區三河町三ノ四 今井印刷所

發賣所 東京市淀橋區百人町二丁目二五四 獨立堂書房
振替東京一九六八番

【本誌定價二十錢】